

# 「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



矢島 好子さん  
昭和3年1月2日生まれ。  
上然別在住

## 私の生い立ちと 幼い頃の思い出

### 私

は昭和3年1月2日に東京都杉並区にある阿佐ヶ谷駅近くで生まれました。1番上が兄であとは女ばかりの1男6女、私は次女でした。実家は駅から続く本通りに面した場所であなぎや天ぷらを出す「東屋」という食堂を営んでいました。2階で宴会があると座敷に座布団を並べるのが私の役目で、家族と従業員も含めて17〜18人の大所帯でにぎやかに暮らしていました。家から学校は近く、小学生の頃は国語が苦手でしたが、算数と絵を描くのが得意で、展覧会に選ばれたり、運動会でも精一杯頑張る活発な子どもでした。

## 東京大空襲と 戦時中の様子

### 昭

和20年3月10日に東京大空襲がありました。

10万人もの犠牲者を出し、その後も空襲は続きました。そんな中、父の店と住宅は焼夷弾による空襲の被害を減らすため、東京都から取り壊しを命じられました。住まいをなくした家族は空き家を借りて暮らしていましたが、低学年の妹2人は長野県に集団疎開しました。そうした状況で父は、「離ればなれになった家族がまた一緒に暮らせる」と国が勧める北海道開拓を決意。同年7月末に東京を出発し、青函連絡船で到着した函館で終戦の日を迎えました。これからの生活を思うと、心の中は不安でいっぱいでした。

## 上然別で開墾の日々

### 東

京から音更村に入った8戸の家族は、役場の人に連れられ上然別に無事到着しました。その日に泊まった集会所で食べた炊きたてのご飯と熱々のみそ汁の味は忘

れることができませぬ。それから来る日も来る日も島田鉾と根切り鉾で柏の木の根を掘り、家族で力を合わせて5町歩の土地を開墾しました。

主食は麦といなきびが中心で、たまに近所の水田を手伝いに行くのと白米をこちそうになりました。開墾の合間に父が結婚式の料理作りなどを喜んで引き受けたので、地域にはずいぶんいけました。

## 父の跡を継いで定住

### 兄

が戦死、姉は教職に進み、私が開拓農家の跡を継ぐことになりました。縁あつて2人の妹が嫁いだ重堂家のお世話で、昭和23年に富山県出身の夫と結婚、4人の子宝に恵まれました。

入植当時は買い物などの用事を足すのに駒場市街まで10キロの道のりを歩いていましたが、長男が幼い頃には家の前をバスが通るようになっていたので、農村部には交通の便が良かったと思います。東京から持参した荷物にミンがアツたのですが、みんな「洋服屋さんが来た」と言っ



東京の阿佐ヶ谷で父が営んでいた食堂「東屋」(家族と従業員の集合写真)

## 伝えたい思い

て、農閑期には子ども服を縫ったり、ご飯を食べておしゃべりをして本当に仲良くになりました。

### 17

歳でここにきてから70年余がたちますが、入植した家で残っているのは私たちだけです。常に支えてくれた夫と重堂家の存在、そして共同でいち早くトラクターを導入したことなど、地域の皆さんの協力がなければ農業は続けられなかったと思います。「とにかく親しくなりたい」、かるた取りや秋祭りでは自らみんなの中に飛び込んでいきました。多くの友人と家族に囲まれ、笑顔が絶えない人に恵まれた幸せな人生です。